
俺と異世界と魔法

蒼い猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と異世界と魔法

【Nコード】

N4143K

【作者名】

蒼い猫

【あらすじ】

ある日、突然現れた謎の亀裂に引き込まれて 異世界に飛ばされた俺達。

飛ばされた先は、魔法あり魔物あり戦争あり何でもありなファンタジーの世界

どたばたファンタジー、どうぞご覧あれ

「はあゝ つかれたあ」

「そんなこといっても 学校は毎日あるんだぞ」

俺の名前は白亜龍ハクアリユウ 俺と話をしているのは俺の唯一無二の親友 黒コ覇幽クハユウだ

目はきりつとしているが、じつは温厚 切れると怖い それが俺の印象

幽は腰まで届きそうな長い髪を首の少し下で縛っている

顔は見た目から温厚と言われそうな優しそうな顔をしている

優しそうだが実は冷酷 それが幽だ

「だつてさ」

「だからお前は——」

性格は似ていない それでも自然と仲良くなれた

「何でもいいからさ 何か面白いことが起こってほしいよ」

「何かって言っても 何が面白いのか 俺にも見当がつかないな」

ジジジ・・・

「でも俺がこんなに望んでいるのに、何も起こらないなんて世界はなんてケチなんだ」

「まあ そんなこというなよ いつかきつと起こるさ」

「やめてっ そんな『あきらめろ、おまえがそんなにバカだったなんて』みたいな目を！」

「おお よく分かったな これからは目だけで会話できるんじゃないか？」

「それじゃあ やってみようじゃないか」

ジジジジジジジジジジジジジジ

「何の音だろうっ？」

「さあ」

大きな何かの音を聞きながら、丁字路を曲がる

「なあ これ一体なんだと思う？」

「さあ 関わっちゃいけないものだとは思っな」

「ほらほら」 折角面白そうなものなんだから、少しくらい調べた
って

目の前にはその空間自体が大きく切り開かれたような高さ数メートル幅一メートルほどの亀裂があった亀裂の中には、緑深い森林があった

「さてさて これはなんだっろな」

「お、おい やめろよ」

まずは石をひとつ拾って投げ込んでみる。すると石は向こうの景色にある森林の中にきちんと落ちた

「ふむ とりあえず安全だなあっと」

「おいってば」

心配して離れていた幽も近づいてくる 俺は片手を亀裂の中に・・・

「大丈夫だよ!? お、おおおおおおおお」

亀裂の中に入れた手が突然あちから吸い込まれ始めた

ガシッ

「え? おい 俺も巻き込むかああああアアア」

「俺たち親友だろ! 助けてくれよ」

つかんだ手を思いっきり握り締め離させないようにする

「お前が自分で入れたんだろ 離せ!」

「いやだ 一人で行くなんて信じられない 仕方ない…」

それ以上吸い込まれないように踏ん張っていた足を逆方向に向け幽を思いっきり引っ張る

突然強くなった力に対処しきれず、俺に引っ張られる幽

「っしゃあ!」

「何してくれるんだ このやろう!」

引き込まれた先は森林ではなく真暗な闇だった・・・

「なあ　ここどこだと思う？」

「さあ・・・　ただ、ひとついえるとすれば・・・」

「落ちていることか！？（だ！）」

そう　落ちている・・・　何もない真暗な闇の中でただ下に・・・下に・・・

そして俺の意識も闇に落ちていった

「こ、こは…？ どこだ…？」

目を開けると広がる森林。脇には幽もいる

「おーい、幽——ん？」

幽に近寄り声をかけようとすると、俺のそばに白い本があるのに気がついた

白い本は、表紙に自分の尾を食べている龍がかいてある。いわゆるウロボロスというやつだ

背表紙には何も書いておらず、後のことは何のことも分からない。ただ、そこにあるということ以外は

「何だろう かなつと」

何の本だろうかと調べてみようかと手に取り、表紙に手を当ててみる

《認証》

☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐ 0 %

個人情報取得開始

「は！？」

突然本から空中にモニターのようなものが飛び出しそのような内容が表示された

《認証》

■ □ □ □ □ □ □ □ 10%
個人情報取得中・・・

急ぎ本を開いてみると、中には

— 翻訳 —

白亜 龍

力：C (筋力：C 技能：C 限界：C)

生命力：C (現在：C 素質：B 限界：A)

耐久力：C (現在：C 素質：C 限界B)

俊敏性：A (脚力：B 《逃走時：S》 素質：A 限界：S)

機転：B (判断力：A 《平常時：D》)

魔力：A (現在：B 潜在：S 限界：SS)

【素質・・・煉獄(内訳 焰、地、闇、樹) 時空(内訳 時間、空間)】

経験：E (現在：NONE)

総合戦闘能力：C

と、書かれているのだが

「なに？ 何語？」

よく分からない文字で形成されていた。唯一 日本語で表記されていた 翻訳という部分を指でなぞってみると、突然そのページが光に包まれ、日本語での表記に代わっていた

「?? 仕組みはどうなってる？」

そっついながらも内容に目を通す・・・

「フッフッフ なんでああああああ なんで逃走時Sなの？
機転も平常時の方が低いつてどういうことだ！ 俺の個人情報返せー——！！」

「何を叫んでいるんだ？」

そばには起きたばかりであろう幽の姿があった 手には俺のと同じような黒い本がある

「あー えっと」

「俺の後ろに回って何をするんだ？」

「これは、こうやるんだよ」

幽の後ろに回りこみ幽の腕をつかみ幽の手を本の表紙に置かせる

《認証》

□□□□□□□□ 0 %

個人情報取得開始

俺と同じように突然本から空中にモニターのようなものが飛び出した

「え！？」

俺のほうは

《認証》

■ ■ □ □ □ □ □ □ 36 %

個人情報取得完了

深層アクセス開始・・・

3割を超えていた・・・その上 深層とやらにアクセスされるそ
うだ・・・

「おい！ これなんなんだよ？」

「さあ？」

「さあって何だ——」

「ちょいこれ見て」

1ページ目には

白亜 龍

力：C （筋力：C 技能：C 限界：C）

生命力：C （現在：C 素質：B 限界：A）

耐久力：C （現在：C 素質：C 限界B）

俊敏性：A （脚力：B 《逃走時：S》 素質：A 限界：S）

機転：B （判断力：A 《平常時：D》）

魔力：A （現在：B 潜在：S 限界：SS）

【素質・・・煉獄（内訳 焰、樹、闇、大地） 時空（内訳 時間、空間）】

経験：E （現在：NONE）

総合戦闘能力：C

アビリティ
能力

契約の契り……………対話をし一定以上親密であるものに血液を多量飲ませれると契約をすることができる

断罪の書の加護……断罪の書の力を使うことができる。言葉の加護、力の加護がある

少し付け足されていた さっきは気がつかなかったが表紙の裏にも何か書かれていたようだ

表紙裏

断罪の書の使い方

この本は、世界を渡った断罪者に送られた、力の発動の媒体である。

1、この本の表紙に手を当てると、使用者の情報が本に導入インストールされる。

2、1ページ 10ページまでは登録された使用者の情報11ページ以降は世界の情報を記載している。

3、本の出現には【BOOK】 非出現には 【BOOK OUT】と唱える

4、本を閉じた状態で持ち、表紙に手を当てるとモニターが出現する

5、モニターでは声に出すことで情報の検索や所持品の収納、管理ができる

6、本は魔力の力場を発生させているため中に浮く、意思により置くことも形も変えることもできる

7、新規情報はしかるべき場所に追加される

[illegible]

「ぐあああああああああああああ もう読みたくなえ
――」

「俺のほうも同じようなもんだな　ただ俺の場合は救済の書だけだな」

自分のものと見比べて言う
幽。

「は？ 救済？ お前が？
ハハハハハハハハハハ」

「何がおかしい！」

「だつて」

二いつて

「殲滅のほうがあつてるよ」

•

「ん？ 何か変なこといたばああああああああ」

殴られた
殴られた
何故殴られた．．．

「もういい おまえの 導入とやらは終わったのか？」

鬼が！ 鬼を従えた幽の姿が！！ そのニコニコと笑った顔が余計に怖いんだあ！

「う、ごめんなさい・・・」

「うむ よろしい」

こ、こわかった 鬼が光臨した・・・

「そ、それじゃあ 幽のもみしてよ」

「ほれ」

幽の渡してくれた黒い救済の書を見える

黒覇 幽

力：B （筋力：B 技能：C 限界：A）

生命力：B （現在：B 素質：B 限界：A）

耐久力：C （現在：C 素質：C 限界：A）

俊敏性：A （脚力：B 素質：A 限界：A）

機転：B （判断力：A）

魔力：A （現在：B 潜在：S 限界：S）

【素質・・・天空（内訳 暴風、大河、光、雷） 幻創（内訳 幻想、創造）】

経験：D （現在：D）

総合戦闘能力：C

アビリティ
能力

異能力・・・・・・テレパシー・サイコメトリー
念話、読心

救済の書の加護……断罪の書を使うことができる。言葉の加護、力の加護がある

「鼻屑ダッ 鼻屑だよ こっちつがふぁあぁ」

「落ち着け もう一度拳骨を食らいたくなければな」

僕らってほんとに友達なんだろうか・・・

「取り合えずだ この本に地図もついていてな 現在の場所が分かったから、一番近くの町に行ってみようかと思う」

本に地はちゃんと図がついていた　ただし縮尺はついていないが・
・

「あ、ああ」

心の隅に一抹の不安を抱えながら、二人は町に歩き出した……

4日後……

「はあ　ようやくついたー」

「ああ　長かったな……」

「「ここが俺らにとっての始まりの町　【エデン・グリーン《緑の楽園》】だ！」」

俺らがたどり着いたのは、緑溢れる豊かな町【緑の楽園】だった。
4日間かけてたどり着くところにはこの世界のこと、ここが魔法の存在する『ファンタジーの世界』であることも…

魔法の使えるものを貴族、使えないものを平民という

貴族は平民を虐げている

平民でも軍に入り、戦争で功績をたてることで騎士になれる
構図としては

平民<<<<<騎士<<<<貴族

のような関係がある

【アリス・グランド】には人だけではなく、エルフやドワーフ、妖精^{アリー}などいくつかの人種がある

エルフを人を嫌い森の奥に住んでいるといわれる

ドワーフは鍛冶が得意なため町の一角で鍛冶場を営んでいることが多い

妖精は森に住んでおり、心優しいものにしか見えないという

【アリス・グランド】には3つの大陸があり、1つ目の大陸には5つの国があり【楽園^{エデン}】【帝国^{エンパイア}】【魔氣国】【悠郭国】【再雲国】の5つがあつて

【楽園】には平民、貴族、騎士と普通の国で豊かに見えるが裏のことは分らない

【帝国】は魔法の使えるものがないく、平民と騎士で構成されている

【魔氣国】は魔法の使えるものしか住んでいない 魔法の使えるものの以外の入国も認めていない

【悠郭国】は誰の立ち入りも認めており、戦争をしない唯一の国でもある

【再雲国】のことは誰もわからず、帰ってきたものは皆そのことに口を閉ざしている はるか西にあり決まった周期で兵を送り込ん
でくるらしい

「ここが【緑の楽園】か」

楽園は5つの大きな町で構成されていて、北の【赤の楽園】東の【青の楽園】西の【紫の楽園】南東の【黄の楽園】南西の【緑の楽園】で構成されている

5つの町全体に大きな魔方陣があり5つの町の魔力を循環させることで強力な結界を張っている
この国に敵意のあるものだけを拒む結界を・・・

緑の楽園は緑が多く活気に溢れる町だったしかしそんな町でも問題は起きる

平民を貴族の問題 貴族同士の争い
今日もそんな争いは起こっていた

「とりあえず町を回ろうか？」

「でも、問題点があるね・・・」

「金がないっ！」

「うううゝ はらへったあ・・・」

ドオオーン

そんな時 遠くから爆発音が聞こえてきた

「なんだろう？ 行ってみよう」

「お、おい」

幽の手をとり走り出す俺

爆発があつた場所には、今もまだ立ち上り続けている白い煙・・・

そのそばで本を持ち、対峙している2人の男

一人はローブをかぶり顔が見えないが淡い燈の本オレンジを持っている

もう一人は長い真つ赤な髪でさわやかなそうな顔をしている 真紅
の色の本を持っている

「何してるんだろう？」

「喧嘩じゃないか？ 魔法での」

「おい、おまえら逃げないと巻き込まれるぞ！」

「心配してくれてありがたいんですけど僕らは大丈夫です」

「は！？」

「おまえさあ　いい加減、邪魔なんだよ」

「だから？」

「ぶっ潰す！」

「Bullet Fire（火弾）」

ローブの男が魔法を唱える

空中に火の小さな槍のようなものがひとつ浮かぶ

「Go（行け）」

赤髪の男は、必要最低限の動きでその攻撃をよける

「Flame Arrow Fry（飛べ　炎の矢）」

赤髪の魔法で炎の矢が現れローブの男に突き刺さる

「ぐっ！　ぐはぁ・・・」

「Flame Arrow 5（炎の矢　5）」

十の炎の矢が現れローブの男に突き刺さる

「一つ」

右腕に

「二つ」

右足に

「三つ」

左腕に

「四つ」

左足に

「五——」

「blaze Snake（焰蛇）」

突然現れた焰の蛇が槍の飲むこむ

「やり過ぎだよ 決着はついているんだから・・・」

「お前・・・ 何なんだよ 邪魔すんなよ」

「やりすぎだつってんだろ！」

『あそこです』

「ちっ」

赤髪の男は反対の方向を向いて走り去ってしまった

俺らは取調室のような場所に入れられている

「俺はやってません」

「じゃあ 誰がやったというんだ」

「赤い髪の男です」

「ふむ．．． またあの男か．．．」

心当たりがあつたようだ

「すまなかつたな」

「いえ こちら——」

「そう思うなら金をください！」

「お、おい」

「二人だけということは旅をしているのか．．． 少しだが路銀を用意しよう すこしまっていてくれ」

「バカヤロー」

「ぐはあっあ」

「何で殴るんだ」

「いきなり金を要求するやつがどこにいる」

「じゃあ いらないのか！」

「い、いる」

「だろう」

まったく素直じゃない・・・

「銀貨を10枚用意した」

金貨1枚で銀貨100枚　銀貨一枚で銅貨100枚　銅貨一枚が100円ほどだそうだ

なのでもらったのは10万円ほどのようだ

「ありがとうございます」

「それじゃあ　どこに行こうか？」

「町のはずれの鍛冶場にも行ってみるか」

町のはずれの鍛冶場に向かう・・・

「えーと　これが銀貨3枚　こつちが5枚・・・」

「二人分買ったら路銀がなくなりそうだ」

「うん　なくなる」

「ああ　あきらめよう」

「そういえば　本って形変えられるそうじゃない？」

「ああ」

「武器にかたち変えればいいんじゃないかなあって」

「やってみようか」

「「BOOK」

「The changing shape of the gun
(形状変化 銃に)」

「The changing shape of the sword (形状変化 剣に)」

俺が銃に幽が剣に形を変えさせる

俺のは漆黒の2丁の銃 拳銃ではなく 装飾銃といったようなものだ 殴るのに適しているような
幽のは純白の2本の剣 大きくも小さくもなく普通の両刃の剣
高く売れそうだ

「さてと 第一に元の世界に帰るにも情報がない 情報を探るのに
ほかの国にいくようでも金がない ということだ ギルドで荒稼ぎ
だああああ」

「おおおおおおお〜〜」

楽園ギルド 緑の支部

「ギルドの新規作成を二人分お願いします」

俺たちはというと、資金稼ぎのためにギルドに来ていた

「はい 新規作成の手続きを二人分ですね」

ギルドは一階建てで、大きな敷地の3割ほどが酒場のようなテーブルで占められ、後は係りの人のいる横に長いカウンターがあるくらいだ

「ではこれに記入を」

本のせいか、知らない文字なのに自分が知っている文字のように文字が読める
記入する項目は…

- ・ 名前
- ・ 年齢
- ・ 出身
- ・ 攻撃手段

のみ 他の人と一緒に仕事をするときに必要な情報なんだろう

「えーと 名前は偽名でもいいんですか？」

「ええ 念のために偽名を使う人も多くいます」

「龍 適当な名前を書いとけ」

「ああ 分かった」

ええと

・名前・・・・・・・・リユウト・ハクアート

・年齢・・・・・・・・14

・出身

「ねえ 出身どうするの？」

「あー 悠郭国って書いとけ」

・出身・・・・・・・・悠郭国

・攻撃手段・・銃、魔法

「はい」「どうぞ」

ほぼ同時に受付に紙を渡す

幽の内容は――

・名前・・・・・・・・ユウト・コクハート

・年齢・・・・・・・・14

・出身・・・・・・・・悠郭国

・攻撃手段・・剣、魔法

「魔法を使うのですね　では、自身の魔力について調べたいときは
いつでもください」

「うい」／「わかりました」

「ではギルド証を発行するのでしばらく待っていてください」

「じゃあ　いこうか　ユウト君？」

「くっ」

二人は近くのテーブルに座り雑談を始める

事実14歳である彼らは成人の集うギルドでは、ただの目障りな存在でしかなかった

「おい　ここは餓鬼が来るところじゃねえぞ」

「」「」「そうだ」「」

「んだよ 文句あんのかよ」

「おい、やめとけこんなやつ相手にしても無駄だ」

幽が相手を罵倒するところだけ妙に強く言い放った

「あ？ てめえ言っただな 表出るよ」

「ああ いいぜ 受けてやるよ」

『おい 坊主やめとけよ 怪我するだけじゃすまねえぜ』

「心配無用だよ」

そして、幽と名前も知らないどっかの誰かとの決闘することが決まった

決闘するのにギルドの中にいた人だけでなく町の人も集まってきた
てかなりの人数が集まっていた

「魔法は？」

「使えばいい 少なくとも俺は使う」

魔法さえ使わせなければ勝てたかもしれないのに、ただの一般人で素人な俺とは違い、幽はあっちでは道場経営者の師範の息子だけ会って剣には精通してらしい。

幽の親父が考えた流派は実戦に向いている双剣をつかった戦い方だったが実戦で使ったことなどあまりないからだ

相手が使うのは、長めの槍だった

「いくぞ」

片手を前に片手を後ろ手に構えその構えのまま体制を低くし突進する。

「くっ」

間合いに入られる前に槍を突き出して弾かれる

「受けれるかなあ！ Let fire still burning desire to kill（火よ 焼き殺せ 欲望のまに）」

「I will storm blown like crazy
（暴風よ 狂ったように 吹き飛ばせ）」

魔法には俺の使ったような本来必要な部分を除いた簡略化されたものと幽が使ったような簡略化されていないものがある。どちらも一長一短だが、簡略化は起動が早いが魔法の威力が低くなる上魔力を

非常に多く使う。簡略化されていないものは非常に高い攻撃力があり魔力の消費が少なくなるが起動が遅いので無防備になるという点がある。

相手の使った火が波のように押し寄せてきたが、突如台風のように強力な風が発生し火の波ごと相手を吹き飛ばす

ちなみに・・・だが、地面も大きく削れ飛んでいき相手に追撃を加えていた

風が収まったところには、十数メートル飛んで言った相手と余裕の表情の幽、静まり返った観客がいる。

「よし おわったぞ ギルドにもどろうか」

「おっけー」

平然と戻っていく二人と、困惑した視線を向ける人々。

「リュウト様とユウト様ですね では、これをどうぞ」

渡されたものは白い下地に、先ほど僕らの記入した内容が書かれていてそれを塗りつぶすかのようになから『F』と書かれている紙だった

「ランクはFからとなります 依頼はランクが自分と同じかそれより低いものしか受けられません ただ実力を認められるとランクがあがります 数多くこなすと上にあがります」

「へっ」

「じゃあ 何か受けるか」

Fランク依頼

草刈

- ・内容 緑の楽園 北部の敷地にはえている 草を刈ること
- ・報酬 銅貨10枚
- ・依頼者 リアナ・フルアイ

キノコ狩り

- ・内容 北の森に生えている青茸10本の納品
- ・報酬 銅貨15枚
- ・依頼者 リアナ・フルアイ

妖狼狩り

- ・内容 魔物の中でも比較的弱い妖狼3匹の討伐 北の森に生息
- ・報酬 銀貨1枚
- ・依頼者 緑の楽園 町長

「3つだけ？」

「みたいだな」

どれも報酬もへばいが簡単におわりそんな依頼だ

「じゃあ これとこれだな」

取ったのはキノコ狩りと妖狼狩り

「これをお願いします」

受注する ユウト

「えっと 質問なんですけど どれくらいこなすとランクはあが
るんですか」

「そうですね 妖狼がりをあと何回かこなせばEになりますね」

「へー」

「ほらいくぞ」

「うい」

森にて

「獲物（妖狼）発見 おりやあああああああ」

銃は発砲音を轟かせ、銃弾は妖狼の頭を貫く

「ふう 硬い装甲もなく大きさもこれくらいじゃ練習にもならないな」

倒れた妖狼を縄で縛り担ぐ

「後はキノコを狩ってかえるだけだな」

キノコを探し、幾本か狩ったところ

[illegible]

バサバサバサバサバサバサバサバサバサバサ

4日間お世話になった（ご飯として）森の鳥たちがいつせいに飛び去っていく

「なんだろう？」

「何か来る構えてろ」

銃を腰から抜き声の聞こえたほうにむける

「GYOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAAAAAAAAAA」

「2匹!？」

「いや 叫び声が違っただけだと思う」

「GYUEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE
EEEEEEEEEE」

「3匹目？」

「いや 違っと思う たぶん」

森の奥から走って現れたものは、

「うん 一応3匹だね」

「ふざけたこと言っでないで撃て」

3つの頭を持つ獅子だった
高さ2 m 幅1 m 体長3 m ほどの大きな獅子

「いくぞっ!」

「おう」

幽の創造は万物を創造できる代わりに多大な魔力を消費するため、
激しい脱力感と頭痛に見舞われる

「time is the stop (時よ 止まれ!) Time
estheratio from one to the l
imit World Stopped (倍率1倍から限界
へ 停止世界)」

突然世界が無音になる

無音の世界の中ただ、ただ引き金を引く
バラバラながらもある一点に向かって非常にゆっくりと進む銃弾

「Cancel (解除) があああ 指が腕があああああ」

停止したような世界で腕を動かし、12発動時に撃った衝撃がすべ
て腕に弾きかえるのだ 痛いなんてものじゃない

「大丈夫か？」

「……あいつ……は？」

「ちゃんと倒せたよ」

「……一応持ち帰ったほうがいいのかな？」

「報告はしたほうがいいだろうな」

痛みが引いてきたとりあえず立たないと

「あててて　しばらくは筋肉痛かな・・・」

「これを持ち帰ったら、ギルドからか町長から金をせしめてしばらく休むか」

「じゃああつちに荷物集めて、もう歩きたくない・・・」

「分かった」

体全体に魔力を循環させる・・・

「Transition space (A and B go to the Guild of green destination) (空間転移 (AからBに移動　行き先　緑のギルド) Range themselves around 1m) (範囲　自身を中心に1m) Imposition (発動)」

光に包まれ、ギルドの前に移動する

「ようやく帰ってこれたな」

「ああ」

「じゃあ　よんでくるよ」

幽がギルドに入っていく

俺は獅子に腰掛けて座る

「これです」

幽が戻ってきたようだ

「こ、これは マンティコア!」

「マンティコア?」

「変異した獅子型の魔物の総称です! そうですね この駆除を依頼すればBランク以上ですから 報酬とランクアップ程度になると思います」

その日、依頼とのは別に金貨2枚、銀貨50枚を貰い宿を取り、すぐにベットに入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4143k/>

俺と異世界と魔法

2010年10月9日22時28分発行